

抗辯

共産主義者同盟政治機関紙

第50号

1978.12.5

150円

価格
人所
行先
発送連絡

晋社区局号便4
北游京都歲書0-195783
東千私東京(開封・密封・送料共)
振替10回2000円
2500円

☆帝国主義の腐朽性に抗し、社会帝国主義・社会排外主義と対決して世界革命の最前線へ！
☆日帝の朝鮮侵略反革命を国内戦へ
☆転化せよ！
☆帝国主義心臓部にプロレタリアートの総蜂起を！

三里塚獄中統一被告団と連帯し 公判闘争の勝利的貫徹を

東京移送、分割公判、早期結審策と相づぐ報復攻撃の中で、三里塚戦士は統一した反撃体制をもつて、二二・六千葉地裁をはじめとした公判闘争へ突入した。長期拘留のもと、三・二六管制塔・要塞戦士の闘いは今なお着々と敵権力をとらえつたり、われわれはその戦闘精神に学び、共に反撃を組織していかなければならない。まさに、今日の革命家の任務こそは、こうした階級闘争の激しい胎動を日帝権力の危機と日本労働者階級人民の正規の攻囲の中にすえきることである。遊撃発刊以来五〇号の足跡をふまえ、革命的ブントを再生し、こうした任務を、われわれは大胆におし拵げいかなければならない。

全国の同志・友人諸君！

三里塚闘争三年の不屈の実力闘争の総力をあげ、日本階級闘争史上に画期的の地平を刻印し

た開港阻止戦被告の裁判闘争が、今開始されんとしている。

横堀要塞死守戦・管制塔突入・占拠を頂点に、日帝福田の三・二〇開港策動を木端微塵に粉碎した反対同盟をはじめとした労農学人民、とりわけ、今なお獄中にとらわれながらも不屈の闘志を打ち固めているわが同志を先頭とした被告

團戦士は、新らな戦場での闘いに起とうとしている。反対同盟のしたかた闘魂に学び、天をもつく氣概で武装したわが同盟！要塞戦士は、

一二月二日に行われる第10期国会議員選舉にボイコットするため、「一二月五日午後六時を期してソウル、仁川、釜山、大邱、光州、全州の全国五ヶ所での一齊に市民と学生の選挙拒否集会を開こう」とするよびかけが發せられた。

一二月七日には大邱（テグ）市で慶北大の学生を中心に、六〇年四・一九峰起以来最大規模といわれる反朴決起！市街戦が闘い抜かれた。

一二月二日には再びソウル大での学生の決起、さらしきり、さらに「維新体制打倒・朴退陣」を叫

朝鮮人民の南北自主統一に連帯せよ 慶北大、ソウル大で相つぐ決起！

二月の国会議員選挙、大統領就任式という第二期維新体制への茶番劇前にして、南朝鮮の反朴・反日・民主・統一の闘いは歴史を画する新たな段階に突入した。

一二月七日には大邱（テグ）市で慶北大の学

生を中心に、六〇年四・一九峰起以来最大規

模といわれる反朴決起！市街戦が闘い抜かれた。

一二月二日には再びソウル大での学生の決起、さらしきり、さらに「維新体制打倒・朴退陣」を叫

一二月二日には

強め攻勢的党建設へ

創刊50号記念 機関紙局アピール
「遊撃」を党の組織者として更に打ち鍛えよ

全国の同志・友人諸君! 「遊撃」読者諸君!
四年間にわたるわが党の建設をめぐる苦闘は、
いうまでもなく、中央機関紙「遊撃」のたゆまぬ
発刊に支えられてきた。われわれの活動の血の
じむような努力の結晶である「遊撃」は、今日、
発刊第五〇号を読者諸君にお届けすることがで
きる。われわれは、本号の発刊にあたって、革
命闘争の決意も新たに、日本労働者階級人民の
思想的、理論的支柱、実践の指針たる内実を獲
得するために、全力を尽して、より一層努力す
ることを、ここに明らかにしたい。

わが同盟は、七四年党内分派闘争をへて、日
本階級闘争の眞の前衛たらんとする、革命党建
設の大事業を開いた。わが党建第一
期の闘いは、第二次ブントの総括の端初につき、
マルクス・レーニン主義の再建のための理論的
・实践的指摘し、マルクス資本主義批判
の限界を正しく指摘し、マルクス資本主義批判
の復権を通じて、反帝戦略主義の克服を大胆に
提起している。

一方、第一次ブントの致命的弱点である組織
問題の解決を、レーニン組織思想の体得を軸に
設定し、党一階級問題の基本的原則を明らかに
しようとしていた。

そして機関紙を軸とした党活動の確立を成し
切ってきたのもこの時期である。すなわち第二
次ブントの分派闘争とともにこの過程では、
ブント系諸派の一分派としての遊撃派が、マル
クス・レーニン主義を掲げ、日本の階級闘争の
激動に立つ、明確な基軸を「遊撃」においては
つきりと明らかにするものであった。さらに、
われわれの組織の骨格築いたのもこの時期で
あり、とりわけ労働者階級に依拠し、労働者革
命家の形成の端初についたのである。

こうした中において、われわれは、金本山
闘争、教育社闘争、住重追浜の闘い等を、全力
で闘い、労働者階級の闘いの諸実践に、本格的に
着手するものであった。われわれの第一期の
本的課題は、次の点に集約されていた。

「日本共産主義運動の前進と、その登りつめ
ている地平の中で問われている課題は、過渡期
世界の階級闘争の現実に耐え抜ける共産主義政
治を組織する」党的主体の内実を、綱領・組織
・戦術にひきつけ明瞭にすることである」ボ
ルシェビキ創刊号)

わが党建設の第一期は、こうして「綱領・組
織・戦術」の原型を形成するところも、七〇年
代中期の画期をなす「二つの天皇決戦」を全国
政治共闘の牽引を軸に、闘い抜いたのであった。

そして第一期の結節点である三全総を実現し、
新たな党建設の段階に突入したのである。
しかし、かかる闘いは、いまだわが同盟が第
二次ブントを完全に克服し、その内在的限界を
止揚するに至っていないことを示した。それは、
主として政治路線上の諸問題と戦術に急進民主
主義の未克服として現われたのである。それは、
労働者階級人民の闘いにしっかりと結合し、闘
い抜かなければならない段階に来て露呈したも
のであり、階級内部の諸実践において醸成され
た革命的政治路線の発展が、従来の急進民主
主義の残滓を取り除く条件を形成したといえる。
こうした事態を確認したわれわれは、七八年
「遊撃」新年号において二つの論文を提起し、「党
の転換」の大方向を明らかにしようとした。一
つは、「階級深部に労働者の布陣を」(「遊撃」第
二論文)であり、大衆運動の左派性に依拠した
急進民主主義を克服し、労働者階級の深部に根
ざした大多数の下層・未組織との結合の闘いを
大胆に提起している。他方、新年号から三回に
わたって連載された「国際共産主義運動上にお
ける毛沢東思想・路線の位置」(滝沢範治論文)
である。これは、中国共産党・毛沢東路線をマ
ルクス・レーニン主義の復権の立場として正し
く評価し、同時に、反スターツ・トロツキズム批判
をテコとして、マルクス・レーニン主義の革命
路線と、とりわけ戦術思想の根本をつかみとら
んとした労作である。

この二つの論文は、われわれの戦術と大衆運
動の諸実践に現われた、反スターツ・トロツキズム、
急進民主主義の一掃の必要性を明らかにする基
本的契機となつた論文であり、また、これを導
きの糸しながら、綱領・組織・戦術の全分
野にわたる検証へとおし括げる道を拓いたので
ある。以降、「遊撃」は、これに併行して、わが
党建設の方向を確定していくための活動指針と
して金紙面を費しつつ、トップ論文・情勢分析、
闘争報告、学習欄の全体を、労働者階級・人民
への宣伝・煽動の武器として鍛えあげてきたの
である。

同時にそれは、紙面構成、内容、執筆体制、
編集、企画等のすべてにわたって革命的飛躍を
要求するものである。しかも、こうした活動は、
党内外におけるあらゆる問題、あるいは階級闘
争に現われる様々な傾向に、機関紙を通じて思
想統合するという観点と一体のものとしてかち
とられなければならない。

わが同盟は、全党活動の基軸に「遊撃」を置き、
これを起点に「党の方面軍を派遣する」という
体制を一貫してとつてきている。とりわけ、今
日のように全国の活動家、共産主義者、諸グル
ルシェビキ創刊号)

政治煽動の強化と革命的プロレタリアートの団結

わが「遊撃」発刊五〇号に際して、われわれ
は再度、自らが機関紙に与えてきた「特別の位
置」を、その原則的觀點を明らかにしていく必
要がある。いうまでもなく「全国政治新聞」の
意義はマルクス・レーニン主義の党とその活動
における根幹である。

社会主義的活動は、社会主義の科学的、理論
的内容を宣伝し、現代の社会、経済体制、そ
の原則とその發展について、現代の社会の種々の
階級について、それらの階級の相互關係につい
て、それらの相互の闘争について、この闘争に
おけるプロレタリアートの役割について、また
没落しつつある階級と發展しつつある階級に対
する資本主義の過去と未来に対する労働者階級
の關係について、国際主義と歴史的任務について、
正しい理解を労働者階級の中に広めること
にある。

宣伝・煽動

リニアートの全世界的軍隊の一部をなす单一の労
働者階級としての全労働者の共通の利害と共
通の事業に対する意識を発達させることにある。
以上はレーニンが、ペテルブルグ労働者階級
解放闘争同盟での実際の活動を通じて総括した
「ロシア社会民主主義者の任務」での宣伝・煽
動の根本問題の要約である。

リニアートの全世界的軍隊の一部をなす单一の労
働者階級としての全労働者の共通の利害と共
通の事業に対する意識を発達させることにある。
以上はレーニンが、ペテルブルグ労働者階級
解放闘争同盟での実際の活動を通じて総括した
「ロシア社会民主主義者の任務」での宣伝・煽
動の根本問題の要約である。

宣伝・煽動

ことは、すでに明らかにしたように、急進民主
主義の克服と不可分な問題である。というのは、
帝国主義批判を単に現状分析の一課題におしと
どめ、帝国主義の搾取の激化とこれへの「反対
者」を導き出す急進民主主義の方法は、レーニ
ン主義の政治的宣伝・煽動の根本とは無縁だか
らである。すなわちレーニンが強調する宣伝・
煽動あるいは「政治的教育」の問題は、現在の
社会体制や、権力の暴力的抑圧に対し、労働
者階級がこれに敵対的な関係にあるという思想
を宣伝するだけでは不充分であるということである。

レーニンは政治的煽動と、政治的暴露につい
ておよそ次の三つの点をあげている。

(1) 権力の抑圧と暴力のありとあらゆる事例
との結びつきについて口をつぐみ、敵の分析だ
けで、指導階級の立場についてアイマイにする
のである。

レーニンは政治的煽動と、政治的暴露につい
ておよそ次の三つの点をあげている。

(2) もし労働者がさまざまに政治的事件や事
実にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知

り、現状分析、政治暴露の基本に資本主義批判
をしており立てるということである。
「賃金労働者は、ある時間無報酬で資本家
のために働く限りで、自分の生活のために働く
ことは、極めて困難で重要なことになる。それ
はレーニン主義の確固たる立場を堅持し、レーニ
ン党の要にあつた「全国政治新聞」の觀点を
主として政治路線上の諸問題と戦術に急進民主
主義の未克服として現われたのである。それは、
労働者階級人民の闘いにしっかりと結合し、闘
い抜かなければならない段階に来て露呈したも
のであり、階級内部の諸実践において醸成され
た革命的政治路線の発展が、従来の急進民主
主義の残滓を取り除く条件を形成したといえる。
こうした事態を確認したわれわれは、七八年
「遊撃」新年号において二つの論文を提起し、「党
の転換」の大方向を明らかにしようとした。一
つは、「階級深部に労働者の布陣を」(「遊撃」第
二論文)であり、大衆運動の左派性に依拠した
急進民主主義を克服し、労働者階級の深部に根
ざした大多数の下層・未組織との結合の闘いを
大胆に提起している。他方、新年号から三回に
わたって連載された「国際共産主義運動上にお
ける毛沢東思想・路線の位置」(滝沢範治論文)
である。これは、中国共産党・毛沢東路線をマ
ルクス・レーニン主義の復権の立場として正し
く評価し、同時に、反スターツ・トロツキズム批判
をテコとして、マルクス・レーニン主義の革命
路線と、とりわけ戦術思想の根本をつかみとら
んとした労作である。

この二つの論文は、われわれの戦術と大衆運
動の諸実践に現われた、反スターツ・トロツキズム、
急進民主主義の一掃の必要性を明らかにする基
本的契機となつた論文であり、また、これを導
きの糸ながら、綱領・組織・戦術の全分
野にわたる検証へとおし括げる道を拓いたので
ある。以降、「遊撃」は、これに併行して、わが
党建設の方向を確定していくための活動指針と
して金紙面を費しつつ、トップ論文・情勢分析、
闘争報告、学習欄の全体を、労働者階級・人民
への宣伝・煽動の武器として鍛えあげてきたの
である。

同時にそれは、紙面構成、内容、執筆体制、
編集、企画等のすべてにわたって革命的飛躍を
要求するものである。しかも、こうした活動は、
党内外におけるあらゆる問題、あるいは階級闘
争に現われる様々な傾向に、機関紙を通じて思
想統合するという観点と一体のものとしてかち
とられなければならない。

わが同盟は、全党活動の基軸に「遊撃」を置き、
これを起点に「党の方面軍を派遣する」という
体制を一貫してとつてきている。とりわけ、今
日のように全国の活動家、共産主義者、諸グル
ルシェビキ創刊号)

なければならない。すなわち、この間われわれ
が明らかにしてきた「現状分析の視角」を正し
く立てるという問題である。それは第二次ブ
ントの全体を貫く反帝戦略主義の克服の觀点に
あり、現状分析、政治暴露の基本に資本主義批判
をしており立てるということである。
「賃金労働者は、ある時間無報酬で資本家
のために働く限りで、自分の生活のために働く
ことは、極めて困難で重要なことになる。それ
はレーニン主義の確固たる立場を堅持し、レーニ
ン党の要にあつた「全国政治新聞」の觀点を
主として政治路線上の諸問題と戦術に急進民主
主義の未克服として現われたのである。それは、
労働者階級人民の闘いにしっかりと結合し、闘
い抜かなければならない段階に来て露呈したも
のであり、階級内部の諸実践において醸成され
た革命的政治路線の発展が、従来の急進民主
主義の残滓を取り除く条件を形成したといえる。
こうした事態を確認したわれわれは、七八年
「遊撃」新年号において二つの論文を提起し、「党
の転換」の大方向を明らかにしようとした。一
つは、「階級深部に労働者の布陣を」(「遊撃」第
二論文)であり、大衆運動の左派性に依拠した
急進民主主義を克服し、労働者階級の深部に根
ざした大多数の下層・未組織との結合の闘いを
大胆に提起している。他方、新年号から三回に
わたって連載された「国際共産主義運動上にお
ける毛沢東思想・路線の位置」(滝沢範治論文)
である。これは、中国共産党・毛沢東路線をマ
ルクス・レーニン主義の復権の立場として正し
く評価し、同時に、反スターツ・トロツキズム批判
をテコとして、マルクス・レーニン主義の革命
路線と、とりわけ戦術思想の根本をつかみとら
んとした労作である。

この二つの論文は、われわれの戦術と大衆運
動の諸実践に現われた、反スターツ・トロツキズム、
急進民主主義の一掃の必要性を明らかにする基
本的契機となつた論文であり、また、これを導
きの糸ながら、綱領・組織・戦術の全分
野にわたる検証へとおし括げる道を拓いたので
ある。以降、「遊撃」は、これに併行して、わが
党建設の方向を確定していくための活動指針と
して金紙面を費しつつ、トップ論文・情勢分析、
闘争報告、学習欄の全体を、労働者階級・人民
への宣伝・煽動の武器として鍛えあげてきたの
である。

同時にそれは、紙面構成、内容、執筆体制、
編集、企画等のすべてにわたって革命的飛躍を
要求するものである。しかも、こうした活動は、
党内外におけるあらゆる問題、あるいは階級闘
争に現われる様々な傾向に、機関紙を通じて思
想統合するという観点と一体のものとしてかち
とられなければならない。

政治煽動を

レーニン中央集権思想の復権と機関紙活動の核心

知らない。眞にプロレタリアートがその指導性を發揮するためには、単に「経済的地位」としての労働者階級が自己の経済的利害を追求するだけでなく、抑圧された人民とともに革命的利害に立脚する闘いを形成し、未来を代表する政治的・階級的能力を身につけてはならない。

今日のように帝国主義の超過利潤の存在条件によつて差別・分断が組織されている中では、このように、帝國主義の超過利潤の存在条件によつて差別・分断が組織されている中では、この

ことはより一層重要な任務である。

従つて、われわれの組織する宣伝・煽動の要は、こうした先進的プロレタリアートの立場を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を立てたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」である。レーニンは応えている。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の彈圧下で、非合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「新聞の役割は、ただ思想をひろめることだけに限られるものでないことは明らかなのであり、まずはたゆまず貫徹されなければならない。

「政治的煽動をおこなうために活動することなどのような『平凡な平和な』情勢においても、どのような『革命的精神の衰退』の時期でも義務である」「何からはじめるべきか」

とりわけ革命の「正規の攻団」を組織するためには、基本にして最も重要な活動である。

階級闘争の発展過程においては、階級的諸条件の転変は不可避であり、いかなる条件においても、革命党の基本的戦術行使が貫徹されなければならぬ。しかも場合によつては、「二十四時間以内に戦術を変更する」という事態にも対処する準備としつかりとした原則が必要である。

労働者階級はこうした確固たる指令部と組織をつくらなければならぬ。しかしこうした階級の攻団を組織せよ」であるべきだということは、われわれの闘争の一般的諸条件を概観する能力

である。レーニンは応えている。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

新聞の意義、占める比重は変わってくるだろうか。否である。たしかに新聞の役割を單なる伝達手段であることは、こうしたロシアの条件と異なるがゆえに新

ための演壇」をつくることは極めて緊要な課題であった。とくにツアーリ専制の弾圧下で、非

合法活動を全面的に強いたためにこそ、党の宣伝・煽動を強めなければならないの

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

指摘のべ、あるいはこれに反対者として

の労働者階級の位置をのべ、「左派的運動」を提起し、排外主義を批判して己れの「純潔性」を

守つたとしても、それだけでは不充分である。われわれは、全階級・人民を率いて闘う革命的・経済的諸条件と結びつけて示さなければならぬのである。

こうした点において急進民主主義とは決定的に区別されるのである。敵の性格の鋭い分析や

をもち、諸事件の歴史的行程「転換」のたびごとにこの一般的諸条件を忘れたりしないすべての人々にとって明らかでなければならぬ。(同上)

すなわち、すべての階級的諸勢力を統合して、実際の決戦に役立つ能力をもつた革命的諸組織、いかなる情勢においても、いかなる戦術のもとでも柔軟に対処しうる能力をもつた諸組織をつくりあげようよびかけることだねければならない。それには、「何から始めるべきか」

である。そこにはロシア革命の初期における革命の初期における革命の根本思想が形成されない。そこにはロシア革命の初期における革命の根本思想が形成されない。

「われわれの意見では、活動の出発点となり、

日中条約を支持し 日中条約を支持しの前進を

一九七八年十月三日、日中友好条約は正式に締結された。この条約の特質は、その第一条に記載された「反権力」の立場がうたいあげられている点にある。この「反権力」条項を日中双方が社会体制を異にしつつも盛りこまねばならなかつた今日の世界階級闘争の特徴とその相互の階級的意図こそ、われわれはしっかりとらえる必要がある。

今日の世界情勢の基本的事態は、米帝を先頭とした帝国主義諸国の侵略・抑圧・反革命策動の激化であり、また、これと対抗したソ連社会主義の「後退国援助」に名を借り、從属化された帝国主義の「後退国援助」を目的とした権力奪取への新たな登場である。ここに全世界的規模で米ソの帝国主義的野望が角逐し、新たな戦争の要素を増大させている。中国共産党・人民は六〇年代初期、ソ連修正主義との路線闘争を行い、七〇年代初期から彼らの社会帝国主義としての行動を激しく批判してきた。とくに七五年以降、ベトナム・ラオス・カンボジアの社会主義革命によって、世界の「憲兵」であったアメリカ帝国主義は、後退を強いた。この間隙をぬってソ連社帝は、「アジア集団安保構想」を打ちだし、また、当面する最も危険な敵としてソ連社帝に対抗することを第一の对外政策の分野におき、全世界に、米ソ権力争奪戦にそなえるように呼びかけてきた。この際、彼等は自らが最も抑圧され収奪されている第三世界人民の立場に依拠し、対外政策をすすめることを表明してきた。日本帝国主義は米帝の「後退」により、中国共産党・人民は、この見地から日中友好条約の締結に向け日本帝国主義の对外矛盾をたくみにひき出したといえる。

全金本山闘争完全勝利に向けて

12・17～18 仙台現地へ総力決起せよ

別棟就労攻撃をもつて、一挙的な全金つぶし
闘争をもくろんだ本山資本の意図は、全
金民同一富城地本の「機関決定」としての別棟
就労強要といふ争議收拾—労使正當化路線によ
るバックアップにもかかわらず、支部労働者の
完全勝利に向けた断固たる決起によって、もの
のみごとに粉砕された。

現在本山資本は、生産性向上—合理化攻撃と
しての「パイ作戦」からはじまる企業戦略がこ
どごとく挫折する中、昨年十一月研究棟を中心
にした大衛村新工場・第一期工事完了を打ちあ
げている。この資本の延命策は「出□なき不況」
下での同族中堅資本として、バルブ業界における
資本間競争に勝ち抜くことを至上命令として
いる。新生産体制の整備、営業部門の強化等は、
組合員の生産性向上部隊へのより一層の純
化と、そしてそれは二組下部労働者の潜在的不
満を蓄積しつつ、徹底した合理化攻撃をもつて
しか、もはや本山資本は生き残りえない。
それゆえこそ、不屈に闘う全金本山の存在
は、かかる資本のまさに第一級の障害物である。
別棟攻撃から中労委和解へ至る中で、本山資本
は、あの労働運動史上例を見ない八・一支部団
交員襲撃を頂点に、警察権力の争議介入、刑事
弾圧を後盾にしつつ、暴力効果をエスカレート
させている。(のべ一五〇人にものぼる負傷
者、被逮捕者!)まさに本山資本にとって中労
委和解とは、全金つぶしの手段にすぎないの
である。

昨年十二月より「和解のための調査」として
再開された中労委攻防こそ、本山闘争八年余の
苦闘をめぐって開始されている。

中労委攻防に勝利せよ

全金民同一富城地本は、中労委再開にあたり
「和解に関する白紙委任と、支部交渉員の指名」
を通告し、「支部が地本の命令に従わない場合は
統制処分を考慮する」とまで言い切った。そ
して、本三回地本定期大会においても、「会社
と直接交渉を行なつて、生産点を握っていくと
いう条件も力量もない」「なんとか局面打開をは
すめることを再確認している有様である。
だがしかし、本山支部の闘う労働者は、別棟
論争以降の困難な闘いの中で、「労働組合は一人
の首切りも許してはならない」「ひとりに対する

攻撃には全体で反撃を」という本山闘争が培つ
てきた労働者の階級的原則を高々と掲げ、実力
闘争を堅持し、もつて闘う團結を打ち固めてき
た。そして中労委和解に対する次のような態度

を明らかにしたのである。

すなわち、本山資本が犯してきた不当労働行
為の数々をまず謝罪・撤回し、原状を回復する
こと、これが和解交渉の一切の前提である、と
いう原則的立場である。これを本山支部は「前
提五項目」(1)不当解雇撤回、(2)原職労働、(3)方
ドマン撤去、(4)ロックアウト以降の未払い賃
金の支払、(5)組合活動の自由)にまとめあげ、

勝利の大方向を決定すると共に、あわせて「八
・一团交員襲撃謝罪」を資本へつきつけたので
ある。われわれは本山支部のこの勝利の大方向
を支持し、「和解に対し、前提」をつけるなど
労働運動のイロハも知らない」とうそぶく民同
に対し、彼ら民同労働運動の歴史が、労働者階
級に対する屈服と敗北の道でしかなかつたこと
を、とりわけあの三井三池闘争の中労委和解
藤林幹旋が争議收拾—闘争敗北—炭労壊滅しか
もたらさなかつたことをつきつけ、統制処分を
ちらつかせる全金民同の「指導」を拒否して闘い
抜くことが問われている。

七三年宮城地労委における「和解」幹旋、七
五年資本と一体となつた別棟就労強要、そして
中労委和解という全金民同の「指導」に対し、
本山支部は「既成戦線との格闘」というひかえ
め表現でもつて支部の闘いとその原則をつき
出してきたが、まさに中労委攻防をめぐるこの
一年間の支部の断乎たる決起こそ、闘争庄殺一
の大痛打であり、三ヶ月のベースで「支部抜き
争議收拾への一大痛打を強行せんとした資本—民同
の思惑を完全に粉砕したのである。そして支部
一支援を貫く戦闘的労働者の布陣の再確立と、
闘争と財政の自立体制構築をもつて、さらなる
前進を開始した。

すでに破産を宣告された労組既成指導部たる
社共・民同・社会排外主義潮流を追放し、帝國
主義労働運動たる同盟・JCを解体し、新たな
労働運動の戦闘的革命的指導部を創出すること
こそ、真に問われている課題である。多くの限
界や様々な傾向を内包しているとはいゝ、「社会
主義をめざす」先進的労働者の闘いが確実に拡
大しており、まさに革命的情勢の端緒的接近は、
階級深部からの労働者大衆の不満、憤慨の細流
として一つの時代基調をつくりつつある。たと
えば、日帝国家権力による侵略反革命一排外主
義攻撃として、その全体をかけた暴虐と庄政の
首切りも許してはならない」「ひとりに対する

三里塚開港攻撃に対し、敢然と決起し、不屈に
闘い抜いている反対同盟農民と労働者階級人民
の力こそ、新たな革命的指導部を生み出す巨大
な基礎である。「共産主義と労働運動の結合」を
めぐる戦術問題(越智論文)で提起したように
急進民主主義的、左翼反対派的な批判のレベル
をきっぱりと清算して、労働者人民の実際の闘
いの中で、現在の勝利と未來の利益を固く結び
つける「正規の攻撃」を組織していくなければ
ならない。

本山闘争の階級的攻勢を

そもそも、民同をはじめとする労組既成指導
部にとって、労働者階級が資本主義の墓掘人と
して日々成長していくことなど思いもよらない。
彼らにとって「資本の專制に対するゲリラ戦」
で、労使関係の正常化という枠組みの中で
出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「春闘構造解体」をもつて、われわれが
かつて批判し尽したように、民同等既成労組指
導部は、その社会排外主義者としての本性をま
すます赤裸々にしている。資本の支配そのもの
には手をふれず、「搾取をめぐる闘い」すら組み
えなかつた彼らは、「わが国の資金が歐米諸国
によく労働組合の交渉力の影響を強く受けた決
定される性格のものではない」と「労働白書」で
述べられているように「分配をめぐる闘い」
の出来事にすぎない。国民春闘をめぐる論戦に
おいて「

